

佐野誠『開発のレギュレーション——負の奇跡・クリオージョ資本主義』新評論 1998年 v+362 ページ

開発をめぐる議論は日本ではアジアに偏重している。開発が歴史経路に依存しているとすれば、歴史研究とともに比較研究が必要となり、ラテンアメリカを含め多様な地域の開発過程の研究が開発論を豊かにし、また政策論議を生産的なものとする。

著者は、純粋経済を想定した理論、方法的普遍主義を排し、発展途上地域の多様な経済発展の動因を、諸利害間・国家間のコンフリクトと制度的妥協形態の差違に求める政治経済学的アプローチを提案する。

そのうえで、一次産品輸出によって経済発展を遂げながらその後衰退したという意味で「負の奇跡」を体現するアルゼンチンについて、成長体制、構造・制度的諸形態、レギュレーション（調整）様式などを実証的に考察している。

著者は、アルゼンチン経済の退行が、内外での利害対立を経済合理的な形で妥結させることをしなかった、あるいは妥結を促すための制度を発達させなかったことに起因するとし、アルゼンチン経済を、非寛容な性格をもったクリオージョに倣って、クリオージョ資本主義と呼んでいる。開発論の新たな地平を開く一書である。（小池洋一）

田中信『地球の反対側から見た「日本」——ブラジルの日本企業を通して考える——』日本図書刊行会 1998年 278ページ

ブラジルで長く銀行経営にあたり、現在は経営コンサルタント業を営む著者の日本企業論である。

ブラジルにおける日本企業のプレゼンスは小さい。正確には小さくなった。1980年代以降の経済危機の中で日系企業を代表する企業の撤退が相次いだ。危機のなかでも生産拠点としてのブラジルの重要性を認識し経営基盤を強化してきた欧米企業とは好対照である。ブラジル経済が再生をとげている現在、日本企業の出遅れは否めない。

著者は、ブラジルにおける日系企業の後退の根本的な原因を、日本企業全体がもつ視野の狭さ、国際事業活動についての理念と戦略の欠如に見いだしている。欧米企業が短期的視点重視、日本企業が長期的視点重視という経営比較が実態に合わないとし、また数々の腐敗事件によっても金融機関の旧経営体制が温存される企業経営のあり方についても、それがとても国際社会では受け入れられないと批判する。

世界経済がグローバル化するなかで、広い視野をもち長期的な戦略に立った経営が求められている現在、著者の苦言に耳を傾けることは多大な価値があるろう。（小池洋一）

加藤泰建・関雄二編『文明の創造力：古代アンデスの神殿と社会』角川書店 1998年 350ページ

東京大学のアンデス調査団による、発掘調査を中心としたアンデス文明の研究が開始されて今年で40年になる。当初は国際的研究水準に追いつくことを

目標とした日本のアンデス研究も、いまでは国際学会をリードするまでになった。本書は同調査団の40年にわたる研究の到達点をまとめたものである。

アンデス文明といえばインカが有名だが、15世紀にインカという統一帝国が出現する以前に、各地で地域的な王国の興亡があった。そして王国という社会体制が成立する以前の時代には「形成期」と呼ばれる独自の文明の展開があったことが知られている。東大調査団はこの形成期に焦点を当てる。従来の形成期の概念を再検討し、アンデス文明の展開に神殿が果たした役割を重視して、新たな形成期概念と編年を提示する。

本書の第1章から第4章までは、コトシュ、ワカロマ、クントゥル・ワシ、ライソンという、調査団がこれまでに発掘した遺跡に関する研究成果を下敷きに、形成期の早期から末期までの文明の展開が通史的に理解できるような構成になっている。

本書は、これまで主に外国語で発表された調査報告のエッセンスを日本語で一書にまとめたというものではない。「本書で初めて形成期社会のイメージを語ったといえるかもしれない」(310ページ)とあるように、新たな論点、仮説が提示されており、読者は学問の先端に触れることができる。(石井 章)

伊従直子著『グアテマラ先住民の女たち：リゴベルタ・メンチュウと民主化への歩み』(世界人権問題叢書) 明石書店 1997年 211ページ

グアテマラ先住民の女性たちは、先住民であるこ

と、そして女性であることで二重の差別的状況に置かれてきた。特に1970年代後半から80年代初頭にかけての内戦時代、軍部や自警団から彼女たちが受けた迫害は計り知れないほど大きかった。

本書はメルセス会の修道女であり、開発途上国の貧困や人権問題に取り組む活動家でもある筆者が取材や文献を通してグアテマラの先住民女性が置かれている状況を日本の読者に伝えることを目的としたものである。

構成はまず第1章「解放への叫び」でノーベル平和賞の受賞者であるリゴベルタ・メンチュウのメッセージを伝え、第2章「コロンブス500年」でコロンブスのアメリカ大陸到着以来、ラテンアメリカの先住民が受けてきた迫害の歴史とコロンブス500年(1992年)を前に新たに生まれた先住民運動の動きが紹介されている。第3章「今、マヤの女たちは：グアテマラ女性12の生き方」では、グアテマラのさまざまな立場にある女性たちの生き様、考え方をインタビューを通して語っている。第4章「先住民問題の背景：グアテマラの状況」では、政府による弾圧から和平合意までの民主化の動きと、内戦時代に大量に生まれた国内外難民の帰還問題に触れている。そして最後の第5章「グアテマラの女たち」で歴史の中で女性たちが立たされてきた状況を概説している。本書はグアテマラのみならず、世界の人権問題に関心のある読者にも一読を勧めたい。(村井友子)